

万葉集の「酒」

小野寺静子

●はじめに

編集部から「万葉集の『酒』」というタイトルの指示があったので、万葉集の「酒」について述べてみたい。

万葉集の研究の歴史は平安時代、梨壺の五人が選ばれ、万葉集の訓みの研究がなされたことから始まり、中世の仙覚による注釈を経て江戸時代の国学者たちによって飛躍的に進展した。その後、近代にはいり、国学者たちの実証主義に加えて西洋の研究法の移入によって更に深化した。アララギ派を中心とする歌人たちの万葉集の読解、民俗学的研究からのアプローチ、漢籍を中心とする比較研究などに加えて、いわゆる万葉愛好者、研究者の多さが万葉集の読解、評価を多様に行っているのが現状で、従

って万葉集の酒についての研究も多様である。

万葉集の酒については、『万葉集にみる酒の文化 酒・鳥獸・魚介』(一市英治、裳華房 一九九三年九月)という本が刊行されており、酒に関する論、特に讃酒歌についての論は多い。今、時間的な余裕がなく、それら先行の論を見ることができず不備な点も多いが、以下、万葉集の酒のあり様、酒と万葉歌の形成の関わりなどについて概観してみたい。

一

「酒」には、濁り酒といわれる濁った酒と清酒すめさけといわれる糟をしぼった透き通った酒がある。また「黒酒くろき」「白酒しろ」^きといつのは、くさぎの灰あるいは黒麹を入れた黒い

酒とそつでない酒のことで、儀式専用の酒であつたらしい。酒の製法は、

君がため醸^かみし待ち酒^な安の野にひとりや飲まむ友なしにして（四・五五五）

味飯^{うまいひ}を水に醸^かみ成^なし我が待ちし代^{かひ}はさねさし直^{ただ}にしあらねば（十六・三八一〇）

とあるように古くは蒸し米を噛^かんで発酵させて造つた。この表現は古事記などにも見える。

この御酒を 醸^かみけむ人は その鼓^{つづみ}臼^{うす}に立てて 歌ひつつ 醸^かみけれかも 舞ひつつ 醸^かみけれかも この御酒の 御酒の あやに甚^{つた}樂^{たの}し ささ

（記四〇）

此は、酒楽の歌ぞ。

又、吉野の白檮の上に、横臼を作りて 醸^かみし大御酒を醸^かみて、……

白檮^{かし}の生^ふに 横臼^{よこす}を作り 横臼^{よこす}に 醸^かみし大御酒^{おほみき} 美味^{うま}らに 聞^{きこ}しもち飲^をせ まろが父

（記四八）

故 是の須々許理 大御酒を醸^かみて献^{けん}りき、……

須々許理^{すすこり}が 醸^かみし御酒^{みき}に 我^わ酔^そひにけり 事無^{ことな}

酒^{さけ} 笑^{わら}ひに 我^わ酔^そひにけり（記四九）

ただ、奈良時代には麴を用いての酒造りが主になってき、蒸し米を噛^かんでの酒造りは次第にすたれていった。

万葉集には歌中や題詞や左注などに、「酒」があらわれ、酒を飲むことを歌い上げるものが多い。中に、「酒を造る歌」（十七・四〇三二）、「造酒司令史田辺福麻呂」（十八・四〇三三）、「熊来酒屋 酒屋のこと」（十六・三八七九）といった飲酒以外のもの、釈・慈の教えの一つとして、「不飲酒」（俗道の仮合即離し、去り易く留め難きことを悲しむ嘆く詩）という語もみえる。

酒という語が枕詞の一部を構成するものもある。「味酒」は「神酒」にかかる枕詞である。「味酒」はおいしい酒の意で、「神酒」は古く「みわ」といわれ、神に捧げる酒のことである。「味酒みわ」は、美味しい神に捧げる酒の謂である。「味酒」が枕詞として用いられるのは、「みわ」と同音の「三輪山」にかかるものとしてである。

額田王、近江国に下る時に作る歌 井戸王の即

ち和ふる歌

味酒^{あじけ} 三輪^{みわ}の山 あをによし 奈良の山の 山のまに い隠^{ひそ}るまで 道の隅^{すみ} い積^{たか}もるまでに……

(一・一七)

は天智六年三月十九日、近江遷都にあたつて天智天皇に
隨行した額田王がその途上、国魂の宿る神山である三輪
山への惜別を歌いあげたものである。三輪山は崇神天皇
代、その祭祀権を天皇家のものとしての位置を得、国魂
の宿る神山として崇められるようになった。大和朝廷に
とつては特別の山であつた。他に「味酒三輪の社の」ハ・
一五二七がある。「味酒の三輪の山に」(十一・二五一
一)、「味酒を三輪の祝が」(四・七二二)という例もある
が、「を」「の」を付し五音になつてゐるのは、もともと
「味酒」と四音であつたものが、日本の歌が五七の定型に
向かう中で付けられてゐたものである。「味酒三輪」の
よしみで後年三輪山は酒の神の宿る山として崇められ、
今では日本各地の酒が奉納されている。「味酒三室の山
は」(七・一〇九四)、「味酒を 神奈備山の」(十三・三
一六)は「三輪山」でなく「三室の山」「神奈備山」に
かかるものである。「三室の山」「神奈備山」は神のいつ
く山で、三輪山の別称ともいわれる。

また「琴酒を 押垂小野ゆ」(十六・三八七五)の
「琴酒を」も「押垂小野」にかかる枕詞であるが、そのか

かり方は不明である。

二

酒は天皇が功労、祝事にあたつて下賜したり、肆宴^{とよのあかり}
でふるまわれるものであつた。肆宴とは豊の明かりのこ
とで、宴では当時としては貴重な明かり(松明や動物の
油を燃したものである。天智天皇時代には水の油、石油、も出
ている)を豊かにともして行つところからきてゐる。

天皇、酒を節度使の卿等に賜ふ御歌一首 并

せて短歌

：天皇朕^{すめらわれ} 珍^{うづ}のみ手もち かき撫^なでそ ねぎたま

ふ うち撫^なでそ ねぎたまふ 歸り来む日に 相飲

まむ酒そ この豊御酒^{にのみ}は(六・九七三)

從四位上高麗朝臣福信に 勅^{みことのり}して難波^{なには}に遣^{つか}は

し、酒肴^{しよがう}を入唐使味耆朝臣清河等らに賜ふ御

歌一首 并せて短歌

：平^{たいら}けく はや渡り来て 返^{かへ}り言^{こと} 奏^{そう}さむ日

に 相飲^{あいしん}まむ酒そ この豊御酒^{にのみ}は(十九・四二六四)

右、勅使を發遣し并せて酒を賜ふ。…

右 冬十一月九日に、從三位 城王・從四位佐為王等、皇族の高名を辞り、外家の橘の姓を賜はることすでに訖はりぬ。ここに、太上天皇・天皇・皇后共に皇后の宮に在して、肆宴をなし、即ち橘を賀く歌を製らし、并せて御酒を宿祢等に賜ふ。…

(六・一〇〇九)

河内女王の歌一首

橘の下照る庭に殿建てて酒みつきます我が大君かも(十八・四〇五九)

右の件の歌は、左大臣橘卿の宅に在りて肆宴するときの御歌、并せて奏歌なり。

天平十八年正月、白雪多く零り、地に積むこと数寸なり。ここに左大臣橘卿、大納言藤原豊成朝臣また諸王諸臣たちを率て、大上天皇の御在所、中宮の西院に参入り、仕へ奉りて雪を掃く。ここに、詔を降し、大臣参議并せて諸王らは、大殿の上に侍はしめたまふ。而して則ち酒を賜ひ肆宴したまふ。…

(十七・三九二丁三九二六)

京に向かふ路の上にして、興に依りて預め作る侍宴応詔の歌一首、并せて短歌

…やすみし 我が大君 秋の花 しが色色に見
したまひ 明らめたまひ 酒みつぎ 栄ゆる今日
の あゆに貫き(十九・四二五四)

二十五日、新嘗会の肆宴にして詔に応ふる歌
六首

天地と久しきまでに万代に仕へ奉らむ黒酒白酒を

(十九・四二七五)

九七三歌は節度使に、四二六四歌は入唐使に、聖武天皇が酒を賜い、この酒は仕が終わり帰った時に一緒に飲もうと天皇ないしは勅使が歌ったものであり、相飲まむ酒、この豊御酒は」といふのは、こういう場合の定形の表現であつた。一〇〇九歌は天平八年十一月九日、城王が橘の姓を賜ることになった時、賀歌と御酒を賜つてゐる。橘の姓は、城王等の母方の姓で、母は当時の皇后(光明皇后)の母で後宮内に隠然たる勢力を維持していた。四〇五九歌は右のような事情にあつた橘の宅に天皇女王らが集つた時の歌である。三九二(三九二六)歌は天平十八年正月、白雪が数寸積もつたことを喜び、太上天皇の御在所で肆宴が催された時、太上天皇がこの雪を題として歌を作るようにとの詔に応えた左大臣橘宿

祢（二〇〇九歌の 城主）の歌である。こつした雪を愛
でるといった風雅な肆宴のみならず、宴（うたげ）は打
ち上げ」の約つたもので、酒を飲み歌を歌い手を打ち上
げるところからきている）では酒がふるまわれ、歌や漢
詩が詔に應じて作られた。四二五四歌は同伴家持が越中
守の任を終え京に向かう路上、侍宴心詔歌をあらかじめ
作つたもので、人々は酒宴での歌を予め作つていたこと
がわかる。四二七五歌は天皇からの酒ではなく、新嘗会
の肆宴で文屋智努真人が新嘗の儀式の酒を遠い未来まで
奉納しようと歌つたものである。

三

酒は宮中における肆宴のみならず、公館での宴や個人
が催す宴でもふるまわれた。万葉集中のそつした宴の代
表的なものとして、同伴旅人が帥として赴いた太宰府公
館での宴と旅人の長男大伴家持が守として赴いた越中守
公館での宴を挙げることができる。両者は場所、時代、
構成人物は異なるが、前者なくして後者はないだろうと
いふほどの関わりを持つ。

神龜四年（七二七）頃、旅人は「西海道（九州）の内
政總監の府であり、また大陸との折衝の門戸」（新編全集
万葉集）であつた太宰府へ長官として赴任する。六三才
のことであるが、旅人の太宰帥任命は養老四年（七二〇）
征軍人持節大將軍としての功績によつての栄転と考えて
よいだろう。天平二年（七三〇）十二月、大納言となつ
て帰京するまでの約四年間、旅人は太宰帥の任にあたつ
た。その任務中、もっとも大規模に華やかに繰り広げら
れたのが天平二年正月十三日の梅花の宴である。

梅花の歌三十一首 并せて序

天平二年正月十三日に、帥老の宅に萃まりて、宴
会を申ぶ。時に、初春の令月にして、氣淑く風和く。
梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫らす。
加以曙の嶺に雲移り、松は羅を掛けて、蓋を
傾く。夕の岫に霧結び、鳥はに封ぢられて林に迷
ふ。庭に新蝶舞ひ、空に故雁帰る。ここに天を蓋に
し地を坐にし、膝を促け、觴を飛ばす。言を一室の裏
に忘れ、衿を煙霞の外に聞く。淡然に自ら放し、
快然に自ら足りぬ。もし翰苑にあらずば、何を以て
か情を、べむ。詩に落梅の篇を紀す、古と今と夫れ

何か異ならむ。宜しく園の梅を賦して 聊かに短詠

を成すべし。(五・八一五～八四六)

鏡前の白粉おしろいのような白梅のもと、天を屋根にし地を席にし、膝を近づけ酒杯をかわす梅花の宴には、大貳紀卿、少貳小野大夫ら太宰府官人をはじめ、筑前守山上憶良、筑前介佐氏子首、豊後守大伴大夫、吉岐守板氏安麻呂、大隈目履氏鉢麻呂ら九州各地の役人らが集い梅を愛で酒に酔い歌詠をなした。万葉集には三十二人の歌が収録されているが、この他に遊行女婦うかがれめといわれる女性たちも侍り賑やかさ、華やかさを添えただろう。三十一首の歌は、正月むつき立ち春の来らばかくしこそ梅を招きつつ楽しく終へめ 大貳紀卿(五・八一五)

我が園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも 主人(四・八二三)

といった歌が多く酒を詠じたものは、

青柳梅との花を折りかざし飲みての後は散りぬとも

よし 笠沙弥(五・八二二)

年のはに春の来たらばかくしこそ梅をかざして楽しく飲まめ 大令史野史宿奈麻呂(五・八三三)

青柳縵かいつに折りし梅の花誰か浮かべし酒杯さかづきの上に 吉

岐目村氏彼方(五・八四〇)

くらいであるが、「大陸との折衝の門戸」である太宰府で舶来の梅花を愛でる宴は、さながら絵巻物のようである。が、実際にはこうした大規模な宴は開かれず、出席していたのはごく一部で、誰かが後に他の人の作も取り入れまとめたとする考えも出されている。

「梅花の歌三十一首」に「後に追和する梅の歌四首」があり、その中に、

梅の花夢に語らくみやびたる花と我思ふ酒に浮かべこそ

一に云ふ「いたづらに我を散らすな酒に浮かべこそ」(五・八五二)

がある。

旅人は都の知人に地酒を贈ることもあつたらしく、

丹生女王、太宰帥大伴卿に贈る歌二首

古人ふるひとの飲のみへしめたる吉備の酒病まばすべなし貴簀ぬきす

賜らむ(四・五五四)

と、丹生女王からの返礼歌が届いている。この歌は贈ってくれた地酒にあたって吐逆するかもしれないと戯れて詠じたものである。

天平二年十二月、旅人の帰京にあたつて送別の宴が開かれる。「書殿にして餞酒する日の倭歌四首」(五・八七六・八七九)という山上憶良の作がある。この場合の書殿」といふのは書籍類を収蔵する書庫をいうのであるから、その一室で送別の宴が開かれたといふのは、多勢の参加でなく旅人と憶良の二人の送別の宴であつた可能性もある。

旅人に同行し太宰府に來た妻大伴郎女は赴任早々没し、旅人は世の中の空しさを知る。それがきっかけの一つとなつて、既に筑前守として赴任していた憶良と旅人との交遊が始まつたのであつたが、大納言となつて帰京する旅人を、旅人より高齢な憶良は羨望と寂寥の念で送る。旅人の長男家持は神龜末頃、太宰府に下向しているが、家持が太宰府に滞在したのは十才前後のことである。大伴家の嫡子である家持は早くからさまざまな教育を受けていたであらうから、旅人と憶良の交遊を充分理解し、心に刻み込んだことであらう。後に越中守として越中に赴任した家持は、旅人の太宰府の宴、旅人と憶良の交遊を追体験するかたちで自らの地方役人生活を送る。

四

家持が越中国に赴任したのは天平十八年(七四六)六月、二九才頃のことである。天平勝宝三年(七五二)七月少納言となるまで、奈良の都とは風土の異なる越中国で過す(任務のため、途中都に戻つたことはあるが)。越中国には掾として既に大伴池主が赴任していた。池主はさつそく歓迎の宴を開き、それを機に二人の歌友としての交遊がはじまる。二人の交遊は家持が少年の日、太宰府で目の当たりにした父と憶良の交遊をたどつたものである。まもなく池主が大帳使となつて都に赴き越中に戻つた時、再会を喜び詩酒の宴を設ける。

右、天平十八年八月を以て、掾大伴宿祢池主、大帳使に付して京師に赴き向かふ。而して同じ年十二月本任に還り到りぬ。よりに詩酒の宴を設け、弾糸飲樂す。この日、白雪忽ちに降り、地に積むこと尺余なり。この時にまた漁夫の船海に入り瀾に浮けり。ここに守大伴宿祢家持、情を二つの眺めに寄せ、聊かに所心を裁る。(十七・三九六)

二人の交遊の中に現れる酒としては他に

七言晚春三日遊覧一首 并せて序

上巳の名辰は、暮春の麗景なり。桃花^{ももはな} 睨^{にら}を照らし
て紅を分ち、柳色^{やなぎいろ} 蒼^{あざ}を含みて縁を競^きふ。ここに手を携^{たづな}
へ、江河の畔を曠^{はら}かに望み、酒を訪^{もと}ひ、野客の家に
く過^{とほ}る。既にして、琴^{こと} 性を得、蘭契^{らんけい} 光を和けた
り。…(巻十七)

があるが、当時も米どころであつた越中国の酒は、華やかな都から離れ越中の国で過さなければならぬ二人にとつて、交遊を深め無聊を慰めてくれるものであつたろう。

越中の長として家持は任務上、人をもてなす宴を開き酒をふるまつ。

右 先の国師の從僧清見といふもの、京師に入るべく困りて飲饌^まを設け饗宴す。ここに主人大伴宿称家持、この歌詞を作り、酒を清見に送る。

(十八・四〇七〇)

天平感宝元年五月五日に、東大寺の占懸^{せんけんし}地使の僧平栄^{あへ}等を饗す。ここに守大伴宿称家持、酒を僧に送る
一首(十八・四〇八五)

国の掾久米朝臣公縄、天平二十年を以て朝集使に付きて京に入る。その事畢^{きは}りて、天平感宝元年五月二十七日に本任に還り到る。よりに長官の館に詩酒の宴を設け樂飲す。

ここに主人守大伴宿称家持の作る歌一首 并せて短歌

…ほととぎす 来鳴く五月の あやめ草 蓬^{よもぎ}かつら
き 酒^{いみづ}みづき 遊び和くれど 射水川 雪消^{ゆきけは}溢^{はふ}りて

…(十八・四二一六)

…僕^{われ}囑^め羅^らを作り、且使者^{かつかひ}を悩ます。夫^{それ} 水を乞ひて酒を得るは、從來能き口なり。論時理に合はば何せむに強吏と題^{しよ}さむや。尋^つきて針袋の詠を誦するに、詞泉酌めども渴^あきず、膝を抱^{ひだ}き独^あり咲^あみ、能く旅愁^{りょしゆ}をく。陶然に日を遣^{おく}れば、何をか慮^{はか}らむ何をか思はむ。…(巻十八)

攀^{とほ}ち折れる保宝葉を見る歌一首

皇神祖の遠御代御代はい敷き折り酒飲^{さけ}みきといふそのほぼがしは(十九・四二〇五)

また、越中国府の役人同志の親しい酒宴もしばしば催される。

ここに諸人酒酣に夜深け 鶏鳴く。これによりて
主人内蔵伊美吉縄麻呂の作る歌一首

(十九・四三三)

天平勝宝三年(七五二)七月、家持は少納言に任じられる。家持送別の宴が開かれ人々は酒を酌み交わす。帰京の途上でまで送別の宴が用意される。

五日平旦に道に上る。よりて国司の次官己下の諸僚皆共に視送る。ここに射水郡の大領安努君広島が門前の林中に預め饌饌の宴を設けたり。ここに大帳使大伴宿禰家持、内蔵伊美吉縄麻呂の蓋を捧ぐる歌に和ふる一首(十九・四三二)

都では藤原氏が次第に勢力を確かなものにしていく。遠く越中国にいて、家持は中央の政界に身をおくことができないことを齒痒く思ったことであろう。そういう意味では家持の越中国住まいには鬱々たるものがある。が一方、越中国住まいはかつて父旅人が太宰府で過ごした風雅な生活を追体験する絶好の機会でもあった。筑紫歌壇が花開いたように越中歌壇も花開いたのである。酒はそれを支えた一つの要素である。万葉の歌の形成に酒は大きな役割を果たしている。

五

都での仲間たちの酒宴も事あることに開かれ、人々はその折ごとに歌を歌い、漢詩を朗詠した。

穂積皇子の御歌一首

家にある櫃に鍵刺し蔵めてし恋の奴のつかみかかり
て(十六・三八一六)

右の歌一首 穂積親王宴飲の日に、酒酣なる時に、よくこの歌を誦み、以て恒の賞でとす、といふ。

旋頭歌

春日なる三笠の山に月の舟出つみやびをの飲む酒坏
に影に見えつつ(七・一二九五)

八月十二日に、二三の大夫等、各、壺酒を提りて
高田野に登り、聊かに所心を述べて作る歌三首

(二千・四一九五、四一九七)

湯原王の打酒の歌一首

焼太刀のかど打ち放ちますらをの寿く豊御酒に我酔
ひにけり(六・九八九)

右の歌一首伝へて云はく右兵衛なるものあり 姓
名未だ詳らかならず、歌作の芸に多能なり。ここに
府家に酒食を備へ設けて、府の官人等に饗宴す。こ
こに饗食は盛るに、皆運葉を用ちてす。諸人酒酣に
して、歌 駱駝^{らくてい}。すなはち兵衛に誘めて云はく
その運葉^{うんは}に關りて歌を作れといへれば、登時^{すなはち}聲に応
へてこの歌を作る、といふ。(十六・三八三七)

閏三月に衛門督大伴古慈悲宿祢の家にして、

入唐副使同じ胡麻呂宿祢等に饗する歌一首

唐国^{からくに}に行き足らはして歸り来むますら健男^{たけお}に御酒^{みき}
奉^{たてまつ}る(十九・四二六二)

右の一首 多治比真人鷹王、副使大伴胡麻

呂宿祢を寿く。

酒は人々の節度を失わせ風紀上問題も出てくる。その
ため都ではたびたび禁酒令が出されたようである。続紀
には天平九年五月十九日、天平宝字二年一月にみえる。
次の場合はいつのことか不明だが、都内村里の住民は集
まって飲食してはならないといった禁酒令の内容が記さ
れている。

大伴坂上郎女の歌一首

酒杯^{さかづき}に梅の花浮かべ思ふどち飲みての後は散りぬ
ともよし(八・一六五六)

和ふる歌一首

官^{つかさ}にも許したまへり今夜^{こよひ}のみ飲まむ酒かも散りこ
すなゆめ(八・一六五七)

有、酒は禁制してはく、京中閭里^{りょうちゅうりやうり}に

集宴^{しゅうえん}すること得ざれ、ただし、親々

一一にして飲樂^{いんらく}することは聴許^{ゆめ}す、と

いふ。これによりて和ふる人この発句を

作る。

しかし、禁酒令にも抜け道があり近親同士一人二人が
飲むことは許されており、酒を飲むことを全面的に禁じ
ることはなかったらしい。

以上の万葉集の酒は宴という集団の中でたしなまれた
ものであった。宮中での宴は公的な儀礼の場であったり、
各家の宴では仲間うちの交遊の場、時には政治的な結東
の場であったりと、宴のあり様はさまざまである。飲食
を伴い、時には遊行女婦を侍らせての宴は享樂的な雰囲気
を想像しがちであるが、そこでは必ずといってよいほど
歌や漢詩が披露されていることを考えれば、宴の場は

各自の文学的素養の披露の場であつたといえる。だから宴で披露される歌や漢詩は酔いにまかせての作ではなく、人々は予め披露すべきものを用意して宴に臨んだもので、その場を想定し、各自力を注いで歌作りしたはずである。もちろん、その場に合わせた即興的なものも披露されたであらうが。

六

酒はひとり飲むものでもある。万葉集には例からいえば少ないがひとり飲む酒も詠まれる。

太宰帥大伴卿、酒を讀むる歌十三首

験なきものを思はずは一杯の濁れる酒を飲むべくあるらし(三・三三八)

酒の名を聖と負せし古の大き聖の言の宜しさ

(三・三三九)

古の七の賢しき人たちも欲りせしものは酒にしある

らし(三・三四〇)

賢しきみと物言ふよりは酒飲みて酔ひ泣きするし優り

たるらし(三・三四一)

言はむすべせむすべ知らず極まりて貴きものは酒にしあらし(三・三四一)

なかなか人にとあらずは酒壺になりてしかも酒に染みなむ(三・三四二)

あな醜賢しらをすと酒飲まぬ人をよく見ば猿にかも似る(三・三四四)

価なき宝といふとも一杯の濁れる酒にあにまさめやも(三・三四五)

夜光る玉といふとも酒飲みて心を遣るにあに及かめやも(三・三四六)

世間の遊びの道にすすしきは酔ひ泣きするにあるべかるらし(三・三四七)

この世にし楽しくあらば来む世には虫に鳥にも我はなりなむ(三・三四八)

生ける者遂にも死ぬるものにあればこの世なる間は楽しくをあらな(三・三四九)

黙居りて賢しするに酒飲みて酔ひ泣きするになほ及かずけり(三・三五〇)

くだらない物思いや偉そつに物を言つよりは酒を飲んだ方がましだ、どんなに貴い宝玉も酒に及ばない、酒を

飲まない人をよく見ると猿に似ている、世の中の遊びの道にかなうのは酔ひ泣きすることらしい、と旅人は詠する。酒は集団で飲み楽しむのが通常のあり方であるが、旅人はひとり酒を飲み、酔い泣き楽しくあれば良いと酒を讃めたたえる。旅人がこつした讃酒歌を作った背景については、この時期の旅人の個人的な生活とも絡み合わせて考えれば、そうせざるを得なかった心情も推しはかることができるが、ここに旅人が手酌で独り飲むのは當時としては違例であり、恐らく漢籍に見る独酌の趣にならったものであるう（新編古典全集万葉集）という指摘のように、漢籍を意識してのものでもある。実際に三九歌は清酒を聖人という濁酒を賢人という故事（『魏志』、『芸文類聚』、三四〇歌は竹林の七賢人（『世説新語』）を踏まえてのもので漢籍の造詣の深さを知ることができ

貧窮問答の歌一首 并せて短歌

風交じり 雨降る夜の 雨交じり 雪降る夜はす
べもなく 寒くしあれば 堅塩を 取りつづし
糟湯酒 うちすすろひて しばがひ 鼻びし
びしに 然とあらぬ ひげ掻き撫でて 我を除き

て 人はあらじと 誇るへど 寒くしあれ
ば 麻衾 引き被り 布肩衣 ありのことと 着
襲へども 寒き夜すらを……（五・八九二）

「貧窮」は「ひんぎゅう」ではなく「びんぐう」ないしは「びんぐ」と読む。「貧窮問答の歌」とは貧者と窮者の問答、貧窮者同志の問答、貧窮についての問答などと解される。風交じり雨降る夜、雨交じり雪降るどうしようもなく寒い夜、堅塩を少しずつ口に入れ、糟湯酒をちびちびすすり、咳き込んで鼻水をすすりながらも自分ほどの人物はほかにあるまいと意気こんでいる貧窮者の姿は、憶良の国司としての経験の中から庶民の生活の苦しい実態を見てのものとも、下層の官人すなわち憶良自身の投影ともいわれる。糟湯酒は酒粕を湯で溶かした飲み物で、酒を飲めない貧窮者が酒粕に甘んじてのものである。宴に群がる人々がたしなむ酒や漢籍に見る独酌の趣にならった飲酒とは異なつて、貧窮者が寒さを凌ぐために飲むものであり、自分が気骨ある人物なのだといと

きの誇りを持たせてくれるものである。

●おわりに

酒は宴に欠かせないものであった。宮中での肆宴であったり、各家で集つた宴であつたりと、宴のあり様はさまざまであるが、そこでは必ずといってよいほど歌や詩が披露された。宴は文芸の場でもある。歌や詩の名手としての自分を主張する場である。人々は宴に臨む前にその宴を予想し、その場にふさわしい表現を予め考えたはずである。酒は宴を媒介に万葉集の歌の形成に大きな関わりをもつたといえる。万葉集から肆宴、宴の歌を取り除いたら、万葉集の歌はどれほどやせ細つたものにならうか、と思わせるほど万葉集の肆宴、宴の歌は豊かである。その一方、肆宴、宴での歌は社交の具と化していく傾向も持ち合わせ、類型的な表現、社交に甘んじる表現に留まりがちでもあり、豊かな創造、自己表現を欠いていくことにもなる。

旅人や憶良の酒のよつに、宴席を離れひとり飲む酒は内的な自分を見据える、宴での酒と異質なものである。

旅人の場合、漢籍に見る独酌の趣にならうといった酒のたしなみの中から歌が生まれ、憶良の場合、ひとり飲む糟湯酒によつやく自負心を保持するといったものであるが、新しい、自己表現を生み出す酒といえる。日本の酒は長く近世の時代まで独酌というより、宴などで多勢で飲むのが多かった。万葉集の酒もその多勢に沿つたものであるが、旅人、憶良の酒は自己の内的なものをみつめた歌詠につながるものであった。

注 万葉集の訓みは『万葉集 訳文篇』（塙書房）によつた。

（古代文学／文化学部教授）